



虹のかけ橋

第26号/平成20年7月



〈製茶に挑戦〉



兵庫県立 但馬やまびこの郷

<http://www.hyogo-c.ed.jp/~yamabiko-bo/>



〈茶すり山古墳見学〉



〈コウノトリ人工巣塔を見学〉



〈ハンザキ(オオサンショウウオ)見学〉

但馬やまびこの郷の宿泊体験活動で大切にしていること

但馬やまびこの郷は、豊かな自然の中で、自然、人及び地域とふれあう体験と集団生活を通じて学校に適応できるよう支援している教育機関です。ここでは、児童生徒とかかわる上で、次のようなことを大切にしています。

- ・仲間やスタッフに受け入れられ、理解されているという安心感を与えること。
- ・子どもたちと一緒に活動し一緒に考え、気持ちにより添い信頼関係を築くこと。
- ・個から小集団、小集団から大集団へ人と人のつながりを深め人間関係を再構築すること。
- ・いろいろな体験活動を通して達成感や成就感を味わうとともに、自分のよさが認められ、ほめられることによって、自信を回復し、前向きに生活しようとするエネルギーをたくわえること。



『里山に響く音あり やまびこの春』

兵庫県立但馬やまびこの郷 所長 杉 村 省 吾

平成20年4月1日付で知事と教育長の要請を受けて、現職在籍のまま県立但馬やまびこの郷の第3代所長に就任しました。数年前、兵庫県臨床心理士会会长当時にスクールカウンセラーの研修会を但馬やまびこの郷で開催して以来の再訪で、久しぶりに山国の大井吉野が目の中に飛び込んできました。所長室の壁には恩師の故河合隼雄元文化庁長官の「ふたつよいこと さてないものよ」の直筆の掲額があり、先生の温もりのある筆跡に再会し、しばし陶然としました。たまたま初出勤の前日、私は下手な毛筆で響の朱文字を背景にして「面ぬぐい真紅に萌ゆる人の世を自ら紡ぐやまびこの郷」の拙句の色紙を認めていました。この拙句は、不登校の子どもたちが、但馬やまびこの郷を訪ね、額に汗をして作業をし、生きていくための人生を自分で培ってほしいという意味を込めたつもりです。

漢字というのは面白いもので、但馬やまびこの郷の「郷」の字の下に音をつければ「響く」という字になります。郷山に音がないのは廃村ですが、子どもたちが薪を割って飯ごう炊さんし、竹細工などを作り、グラウンドでサッカーなどに興じる賑やかな喚声が響く但馬やまびこの郷は、子ども同士、子どもとスタッフがコミュニケーションを交わして響き合う文字通りの桃源郷です。この「子どもと響き合う」という文言について、私はいささかの感慨を抱いています。というのは、不登校に関する問題は、親鳥が卵を孵化する際に、子どもが外へ出たいと思うときに、雛が貝殻の内側を突っつくと同時に、親鳥がタイミングを外さないで、外側から貝殻を突ついてやる、いわゆる「嘴打ち(はしうち)」を連想させるからです。不登校に関する問題は、主として子ども、家庭、学校の3者間の問題ですが、とかく、子どもは親や学校のせいにし、親は学校のせいにし、学校は家庭のせいにするというパターンが多いように見受けられます。子どもたちが自立性と自律性を獲得していくためには、他に責任を転嫁することでは、根本的に解決しません。この3者間の「嘴打ち(はしうち)」にみられる響き合い、換言すればコミュニケーションの変化が不可欠と思われます。



〈お茶を点てる〉

スクールカウンセラーの入っている学校や相談機関などで行われている不登校児に対する心理療法には、来談者中心療法、簡易精神分析療法、表現療法、認知療法、臨床動作法などが挙げられます。これらの方法のうち、子どもが積極的な関心・興味・やる気を持って取り組むようであれば、どんな心理療法を取り入れても良いと思っています。しかし、ここ但馬やまびこの郷では、これらの心理療法のほかに、ここでしかできない生活環境療法を取り入れています。

生活環境療法というのは、山紫水明の恵まれた自然環境の中で、子どもたちとスタッフ、そして若々しい大学生のフレンドリーサポーターが寝食を共にし、生活を通して生きることの意味と勇気を培っていく心理療法です。みんなで料理を作り、サイクリングや登山に挑み、竹細工を作り、村の古老にわら細工や茶摘みを教わり、バスで釣りやスキーに出かけます。夜は天然温泉に入った後にトランプやゲームに興じたり、満天の星に宇宙のロマンを感じたり、ときには夜遅くまで生きることのしんどさと居場所のなさをお互いに語り合うこともあります。このような出会いを通して、子どもたちは、親子とは何だろう、同胞とは何だろう、友情とは何だろう、学校へ通うとは何だろう、死ぬって何だろう、生きていくって何だろうという多くの「何だろう」を経験していきます。我々は日頃からこのような哲学的命題を考えながら、生活しているでしょうか？こうした命題を、不登校児達の多くは、人生の比較的早い段階に経験しているのではないかと私は感じています。但馬やまびこの郷にはこれらの疑問に答えてくれる自然と人があります。

先日、子どもたちと千成瓢箪の苗を植え付けました。「ひょうたん」の花言葉は「夢」。焼け付くような夏の陽で育った「夢」に「響」と墨書したひょうたんを、子どもたちが持ち帰れる山里の秋の訪れを今から楽しみにしている昨日です。



〈ひょうたんを育てる〉

不登校担当教員研修会より

5月29日、不登校担当教員研修会(第1回)を開催しました。公開講座では、「不登校のタイプと段階に応じた対応」と題して千葉大学教授の小澤美代子氏の講義がありました。不登校担当教員60名と公開講座受講者90名に参加いただきました。講義の後、「小澤美代子先生を囲んで」の中で「保護者への働きかけ」や「別室登校」についての質問があり先生より助言をいただきました。



講義 「不登校のタイプと段階に応じた対応」より

〈不登校のタイプ分け〉

●心理的要因をもつタイプ

- ・子ども自身が過敏すぎる心や強い不安を抱えて集団に適応できない場合や思春期の特性である自我的確立に立ち向かい、自己への不安や体制の権威に対する反発から急激に葛藤状態になる場合。
(対応) 心理的な対応が必要で、カウンセリングなどが有効。場合によっては医療的な対応も必要。

●教育的要因をもつタイプ

- ・「学習」と「対人関係」でのつまずきや挫折にあった場合。
(対応) 受容中心のカウンセリング的な対応だけでなく、個に応じた具体的な学習の援助や対人関係の配慮など学校での教育的な対応が必要。

●福祉的要因をもつタイプ

- ・背景に家庭崩壊、経済的困窮、家族の病気、虐待などが絡んでいる場合。
(対応) 怠学や非行、長期的引きこもりに移行する可能性がある。保護者や本人が自ら医療機関や相談機関を訪れることがまれであり、一番身近で状況を把握できる学校が福祉事務所や児童相談所など福祉的な機関に積極的につなぎ、連携を図ることが必要。

〈不登校の始まり方〉

●急性型

- ・それまで特に不適応もなく過ごしてきた子が、何かの出来事をきっかけに急激に不登校になる。
- ・思春期の自我獲得に伴う不安・葛藤や、学校生活での成績の急落、対人関係のトラブルなどの学校要因、家族との死別、親の離婚・再婚、家庭状況の急変による喪失感や精神的混乱などがある。
(対応) 問題解決的、関係調整的視点が必要。早急に状況把握と適切な対応を行い、できるだけ早期に不登校状態の解決を図る。

●慢性型

- ・日頃から休みがちで特に大きなきっかけもなく休み始め、気がついたら不登校になっていた。
- ・普段からあまり元気がなく、対人関係を作り出す力がない。成長の過程で手をかけられていなかったり、過干渉や過保護などで適切な養育に欠けたりしていることがある。
(対応) 事態は長期的に進行しているので、休養をとってもすぐには改善しない。現状を維持しつつ少しづつがんばらせたり体験をさせたりして力をつける等の継続的なかかわりが必要。

「小澤美代子先生を囲んで」より

Q 保護者に学校に行かせようという意識が低く、本人も行こうという気持ちがない。どのように対応したらよいのか。

A 慢性型のタイプはエネルギーが不足の状態。なくなると不登校になる。子どもにとってエネルギーは愛情である。ネグレクト状態の子どもは、愛情が少ない。エネルギーを一杯にさせるために教師ができることとして、楽しいこと、好きなことをたくさん経験させるなどがある。（プレイセラピーなど）

Q 対応が難しい保護者にはどう対応したらよいのか。

A 保護者との関係をこじらせないことが大切である。保護者との話し合いは、時間と場所等の枠を決めることが必要である。また、担任と保護者に校長、教頭、学年主任などが入って対応することが大切である。

Q 別室登校している生徒がいる。卒業式までこの状態でいきそ�であるがこの状態でいいのか。

A 別室登校には2つのパターンがある。不登校になり始めた頃と、回復期である。回復期には次のステップに移る取組をしていかなければならない。

〈教室に入りやすい時期〉①学校が変わる。②学年が変わる。③学期が変わる。④行事、試験などの順である。そのためにこの時期を目指して準備をすることが大切である。

・適応教室に通っていても、状態をよく見つめて、①から④のような時期に働きかけが大切である。

Q 別室登校で、神経症的、問題行動、発達障害など様々なタイプの生徒が混じっていて、運営がしにくい状況にある。どうすればいいのか。

A 時間と場所を区別することはできないか。但し、分ける場合は、保護者の承諾をもらうこと。

・周囲の先生方から援助してもらうこと。一人で解決しようとする。

トピックス

地域やまびこ教室

多様な不登校の実態への対策として、より多くの児童生徒及びその保護者が当所の体験活動に参加できる機会を提供し、再登校に向けた支援を行うとともに、今後の但馬やまびこの郷の利用を促進するために県下各地で実施します。

今年度は、7月から10月にかけて、県下7会場で、1泊2日または1日の日程で実施します。活動の内容として、児童生徒には、調理や製作、スポーツ、ハイキング等の活動、保護者には、親同士が語り合い、情報交換する交流会等のプログラムを組んでいます。

一人でも多くの不登校や不登校傾向の児童生徒とその保護者に参加を呼びかけてくださるようお願いします。



不登校に関する研修会

「不登校の子どもと家庭にどうかかわるか」をテーマに県下5会場で実施します。兵庫県においては、不登校になったきっかけとして家庭生活に起因するものも多い傾向にあります。学校は、保護者の協力を求めて家族関係や家庭生活の改善を図っても、なかなか効果があがらないといった状況もあります。

本研修では、午前中は、大学教授等による講義、午後はグループに分かれての演習を行い、学校と家庭を結ぶために学校は家庭に対してどのように働きかけ、支援していくべきか研修を深めていきたいと思います。一人でも多くの先生方の参加をお待ちしております。

